

文型・文法4

衣川隆生 金久保紀子 長能宏子

Grammar 4

KINUGAWA Takao, KANAKUBO Noriko, NAGANOU Hiroko

1. クラスの概要

日本語補講「文型・文法4」は、中級前期（日本語学習歴350～500時間程度）の学生を対象とした授業を行っており、初級で学習した文法の基礎知識をベースに、日本の高等教育機関で研究活動を行ったり、社会や職場で日本人との知的交流を行ったりするために必要な言語運用能力の養成を目標としている。

授業は、衣川、金久保、長能の3教官の分担制で運営しており、その他に、日本語ボランティアに練習、発表準備、発表評価の補佐としてクラスに入ってくれている。現在、各授業に4名前後のボランティアの登録がある。

学生の登録者数は、毎学期35名前後であり、約5割を中国、2割を韓国からの留学生が占めている。平成15年度1学期には40名(12ヶ国)、2学期には38名(16ヶ国)の学生が登録している。

2. 教材

教材は『日本語中級文型表現練習2（改訂版）⁽¹⁾』を使用している。この教材は、一般社会や専門の研究分野での調査報告や意見発表、ディスカッションなど、言語による知的活動に必要とされる言語運用能力の養成に重点を置いた課題中心のシラバスで組み立てられている。中級中期に約40～80時間かけて使用することが想定されており、以下の課から構成されている。

第5課 相談する・助言する

第6課 新しい経験について意見を述べる

第7課 社会的な変化とその背景を考える

本教材作成の意図として、学習者が、自分自身の文法力、語彙力、発音、コミュニケーションなどを的確にモニターする力をつけ、初級レベルの言語活動、表現力をさらに洗練された中級レベルのものへと磨き上げていく必要性を自覚することに重点を置いている。

そのため、各課の冒頭に＜準備活動＞があり、そこでは、まず目標とする言語活動を学習

者が実際にやってその発話を録音してみるという活動が設定されている。その上で、モデルテープを聞き、自分自身の現在の力と、次に目指すべき中級のモデルとを比べる活動が準備されている。この比較によって、初級と中級の言語表現の違いを自覚させ、学習者に自己モニターラーをつけさせることを大きなねらいとしている。

課の中心となる「表現練習」は、主に目標となる言語活動を細分化したユニットの口頭練習からなっている。各ユニットごとに【聞いてみよう】【練習してみよう】【話してみよう】の順に進められる。各課の最後に「解説」があり、文法知識の不足を補ったり、初級で学習した文法事項の整理を行ったりすることができるようになっている。

3. 授業運営

文型・文法4では各課を8~10回の授業で終えるようなデザインとなっている。具体的には、以下のような割合で進めていく。

1) 文法チェックと文法解説（1回~2回）

「文法チェック」と「文法解説」とは、焦点項目となる文法の概念、形式、用法を確認する活動である。以前は、各ユニットごとに焦点項目を取り上げていたが、現在では、各課開始時に、その課で扱う文法項目を網羅的に扱う方式に変えている。

例えば、第7課「社会的な変化とその背景を考える」では、以下のような問題を提示している。

日本人の喫煙率はどう_____を分析したいと思います。 →<解説>II

- | | |
|---------------|--------------|
| a. 変化してきたかどうか | b. 変化してきたか |
| c. 変化してきたの | d. 変化してきたという |

平成5年度1学期までは、授業で約15分かけてこの問題をやり、答え合わせをしながら解説する、という方式を探っていたが、2学期からは、授業前に解説に目を通した上でWeb上から提出するという方法を探るようになった。この結果、担当教官は事前に正答率、項目選択率を把握することができるようになり、項目別に解説にかける時間が調節できるようになった。

2) オリエンテーション（1回）

「オリエンテーション」とは、各課で最終的にどのような活動を行うかを示し、学習の動機付けを行うとともに、学習項目に対する知識の構築、活性化をねらった活動である。資料1に「第6課 新しい経験について意見を述べる」のオリエンテーションの教材を例として添付する。後述するように、各課の最後には「まとめの活動」が予定されている。まず、「まとめの活動」と同等の活動を学生に行わせる。次に、以前の学生が行った記録の中から、参考となる事例を抜き出して見せ、その談話構造、表現形式などを理解させる。その上で、自分自身が行った活動と参考事例の談話構造、表現形式を比較し、何が問題で、何が足りない

かを理解させる。

教材の紹介の項目では、各課の冒頭には＜準備活動＞があり、まず目標とする言語活動を学習者が実際に行った上でモデルテープを聞く、と書いたが、不完全であっても実際に学生がやっている具体的な事例を見ることで、より高い動機付け、知識の活性化が行われると判断し、現在ではこの方法に変更している。

3) <表現練習> (4~5回の授業)

次に、各ユニットの＜表現練習＞を行う。資料2に第7課のユニット1の【練習してみよう】【話してみよう】の抜粋を添付する。

学生には授業前の予習課題として該当ユニットの【聞いてみよう】が課せられている。授業では、【聞いてみよう】の中から発話の題材となるものを取り出し、内容、及び焦点項目となる文型・文法の聞き取りを行い、そのユニットの目標を確認する。その上で、【練習してみよう】【話してみよう】を行う。【練習してみよう】とは、教材に示されている語句を使って、目標となる談話を構築していく練習、【話してみよう】とは、課の最終に行う「まとめの活動」を視野に入れながら、自分で内容を考え目標となる談話を構築する練習である。

この段階では、学生5~6人ずつと日本語ボランティア1人が一つのグループとなり、練習を行う。【練習してみよう】のCUEを使ってできる談話は一通りではなく、さまざまな方法で表現が可能である。日本語ボランティアには、学生が表現したい内容に適切な語を提示すること、正確さ、適切さの判断をすることを求めている。

4) まとめの活動 (2回)

各課の最後には、以下の「まとめの活動」が行われる。

第5課：「相談する・助言する」ロールプレイを2つ実施する。ロールプレイは、教師、日本人ボランティアと一对一で行い、それをビデオ録画する。評価は、教官(80%)、自己評価(10%)、ロールプレイの相手の評価(10%)である。

第6課：日本での新しい経験についてどう思ったかの発表を行う。発表は一人で行い、ビデオに録画する。評価は、教官(80%)、自己評価(10%)、相互評価(10%)である。

第7課：社会的な変化とその背景について発表を行う。発表は一人で行い、ビデオに録画する。評価は、教官(80%)、相互評価(10%)である。

「まとめの活動」の前には、どんな活動を行うか、だれがどの程度の評価を行うか、何を評価するか、が示される。資料3にオリエンテーション用教材を添付する。第5課においては、教師、日本語ボランティアがローププレイの相手として、4カ所に分かれて待ち、そこに順番に学生が来て、その場でロールプレイをする、という方式を探っている。その際には、日本人ボランティアにも会話相手として加わってもらうとともに、五段階の主観的評価を依

頼している。第6課、第7課においては、10人前後のグループに分かれ、そのグループのメンバーに対して発表するという方式を探っている。学生はお互いの内容を聞き取り、その発表がどうだったかをA~Dで相互に評価している。また、第5、6課においては、自分自身のビデオ録画を学生が見て自己評価するということも行っている。

5) クイズとテスト

第5課と第6課が終わったところで、それぞれの課のクイズを、第7課が終わったところで、第5課～第7課のテストを実施している。

4. 評価・成績

成績評価は以下の割合で行っている。

クイズ (L5~L6) 2回	$15\% \times 2 = 30\%$
テスト (L5~L7) 1回	$20\% \times 1 = 20\%$
文法の宿題 (L5~L7) 3回	$5\% \times 3 = 15\%$
まとめの活動 (L5~L7) 3回	$10\% \times 3 = 30\%$
日常評価	5%
	100%

5. 今後の課題

「文型・文法4」は日本語補講であり、大学院入学前の研究生、大学院生、短期留学生などが在籍する。教材として使用している『日本語中級文型表現練習2(改訂版)』は、上述したように知的活動に必要とされる言語運用能力の養成に重点を置いた課題中心のシラバスで組み立てられている。特に「第7課 社会的な変化とその背景を考える」は、図表の説明、比較、検証を取り上げた内容であり、アカデミックスキルの養成を目標として構成した課である。大学院入学前の研究生、大学院生のように、日本語によるアカデミックスキルを必要としている受講生には有用であるが、短期留学生のように、そのような技能は必要ない学生にとっては、学習動機も高めにくいだけではなく、内容的にも消化しにくいものとなっている。今後は、これらの点を考慮し、一般的な日本語を学習するクラスとアカデミックスキル養成のための日本語クラスを分けていくことが必要であろう。

また、授業の形態として、「日本語ボランティア」の参加を前提とした場合、ある程度まとまった人数を学期ごとに募集するという方式も検討する必要がある。学生に対する授業評価の結果を見ても、「日本語ボランティア」の参加に対しては、ほぼ肯定的な意見が返ってくる。このような学生の意見にも答えられるように、ボランティア・プール制度などの方式を考える必要がある。

(資料1)

「第6課 新しい経験について意見を述べる」オリエンテーション

1) 次の質問について、グループで話し合ってみてください。

1. 日本で次のことをした経験がありますか。した人は何回しましたか。

温泉に入る	露天風呂に入る	割り勘で払う	おごる
畳の部屋で寝る	ふとんで寝る	箸で食べる	宴会に出る
相撲を見る	一人で暮らす	納豆を食べる	カラオケで歌う

経験 : experience

温泉 : hot spring

露天風呂 : an open-air bath;

割り勘 : Dutch treat

おごる : to treat someone to

宴会 : banquet, party

相撲 : sumo (wrestling)

納豆 : fermented soybeans

2. その他に、日本に来て、自分の国とは違う習慣、規則でおもしろい、と思ったことがありますか。それは何ですか。

3. その経験をしたとき、どう思いましたか。そのときの気持ちや感想を話してください。

4. あなたの国と比べてみてください。できれば、次のように話してください。

5. その経験、習慣、規則について、今はどう思っていますか。

3) ビデオを一度見てください。この人はどんな経験について話していますか。

- どんな経験ですか。
- はじめはどう思いましたか。
- どうしてそう思いましたか。
- 今はどう思っていますか。

4) 第6課では、授業の最後に、皆さんにビデオのように発表してもらいます。発表は、グループでも一人でもいいです。もう一度、ビデオのように、皆さんに日本に来て経験した習慣、規則についてグループの人に話してみてください。話すときには、下の形ではじめてみましょう。

さんは、_____したことがありますか。

5) 今まで話したことを考えながら教科書の【言ってみよう】をやってみましょう。

(資料2)

ユニット1 発表の話題、目的、構成を説明する

【練習してみよう】

下のことばを使って、1) 発表の話題・キーワードを取り上げ、2) 話題・キーワードを説明してください。そして、3) 発表では、どうやって、4) どんな疑問に対する答えをさぐるのか、という分析の方法と発表の目的について説明してみましょう。必要な場合は、図書館やインターネットで話題、定義の説明を探して説明してください。[練習のための表現] を参考にして、例のように話してみましょう。

話題 キーワード	定義	方法	目的
少子化 現象	子供が少なくなる 現象	出生率の変化 意識調査の結果を見る	・少子化がどのように進んできたか ・なぜ少子化が進んできたか

(中略)

例) それでは、発表を始めたいと思います。

現在、日本では、少子化が大きな問題となっています。少子化、というのは、子供が少なくなる現象のことで、日本だけではなく、世界各国でそれが問題となっているそうです。

そこで、今日の発表では、まず、日本の少子化がどのように進んできたのかを分析しようと思います。次に、なぜ少子化が進んできたのか、そして、今後日本社会や企業は何をしなければならないのかについて意見を述べたいと思っています。

【話してみよう】

1. 最近社会的な問題となっている話題・キーワードを一つ下から選んでください。そして、その話題の定義、疑問点、疑問に対する答えを探る方法は何かについて考えてください。定義がわからないときは、図書館やインターネットで調べてみましょう。

- ・地域の国際化 核家族化 少子化 高齢化社会 産業の空洞化 溫暖化
- ・男女共同参画社会 携帯電話の普及 ボランティア社会

(資料3)

「第7課 社会的な変化とその背景を考える」発表について

第7課では、「社会的な変化とその背景を考える」というテーマで発表してもらいます。発表はビデオ録画します。

- 発表の時には、必ず「社会的な変化」を説明してください。そして、その変化を示す図、表をみんなに見せながら発表してください。
- 話題は、自分で探して選んでください。教科書の中の話題を使ってもいいです。教科書の中の話題、図、表を使う時でも、話す内容は自分で考えてください。

発表は次のように評価します。

- 1) 評価は、先生(90%)、クラスメート・ボランティアの評価(10%)です。
- 2) 評価は、次のポイントを見ます。

- 下の内容を a) 話しているか、b) 正確か(accurate)どうか、c) 自分で考えた内容か、教科書のコピーではないか

- ・発表の話題、定義、方法、目的、構成を説明したか(ユニット1)
- ・変化を説明したか(ユニット2／3)
- ・問題点を指摘したか(ユニット3)
- ・原因・背景を説明したか(ユニット3)
- ・まとめを話したか(ユニット4)
- ・今後の課題を示したか(ユニット4)

- 文体 (発表のときの文体で話せたか)
- 発音(pronunciation)、イントネーション、スピードはわかりやすいか
- 発表技術 (読んでいいか・図、表の使い方はよかったです)

(1) 小口・金久保・加納・衣川・戸田・長能(2003)『日本語中級 文型表現練習2 (改訂版)』筑波大学留学生センター